



# インド仏教論理学におけるpararthanumanaの概念の変遷 : その起源をめぐって

著者	小野 基
雑誌名	印度學佛教學研究
巻	60
号	2
ページ	1012-1007
発行年	2012-03
権利	日本印度学仏教学会
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00159875">http://hdl.handle.net/2241/00159875</a>

doi: 10.4259/ibk.60.2\_1012

# インド仏教論理学における *parārthānumāna* の概念の変遷 ——その起源をめぐって——

小 野 基

## 問題の所在

「他者のための推理」の概念の起源に関しては、「自己のための推理」(*svārthānumāna*)「他者のための推理」(*parārthānumāna*)の二分法がディグナーガの創案ではなく、ヴァスバンドゥの散逸した論理学書 *Vādaividhi* (以下 VVi) の中に既にその萌芽があった、というフラウワルナー博士の説が今日まで承認されてきた。1933 年の論文で示されたこの見解は 1957 年の論文「ヴァスバンドゥの *Vādaividhi*」でも保持され、彼は自ら収集した断片から再構成した VVi テキストの中に、「以上で論証と疑似論証が説明された。論証は他者への教示に資するもので、自身の教示に資するのが正しい認識手段である。後者は直接知覚と推理の二つである」という文章を置いた (FRAUWALLNER 1957: 120)。フラウワルナー博士は、ディグナーガの『因明正理門論』(以下 NMu) が VVi の構成に倣うと共に、その多くの部分を援用していると推定しており、この文章は NMu の次の箇所から採られている。

- ① NMu 3b7ff: 如是略説宗等及似。即此多言説名能立及似能立。隨其所應爲開悟他說此能立及似能立。爲自開悟唯有現量及與比量。彼聲喩等攝在此中。故唯二量。由此能了自共相故。非離此二別有所量爲了知彼更立餘量。(桂 1981: 82; 桂 1982: 82f.)

ここで「他者のため」のものとするのは、あくまで論証 (*sādhana*) と疑似論証である。Pramāṇasamuccaya (以下 PS) に至り、ディグナーガは自身の論理学を直接知覚と推理という認識手段を中心とした体系に改め、推理を二分して従来の推理を「自己のための推理」、論証を「他者のための推理」と名付け、論証を認識手段としての推理の中に統合した。だが PS における推理の二分の萌芽は上記箇所に既に存していたと見てよい (桂 1982: 82)。しかしながら、この文言が VVi にまで遡るかは疑問である。本稿では、その疑問の根拠を論じ、推理の二分の萌芽がヴァスバンドゥに既にあったとするフラウワルナー説に疑義を呈する。

## ヴァスバンドゥの論理学書についての宇井博士の研究

NMu には『論式』という書名が二度言及される。その最初の方が、

- ② NMu 1a10f: 宗等多言説能立者。由宗因喻多言辯説他未了義故。此多言於論式等説名能立。

であり、神泰は『理門論述記』で下線部に註釈し、「言論式等。則等取論軌及論心。此三論並世親所造。」(T1839, 77a28f.) と述べている (桂 1977: 110f.; もう一箇所は NMu 5c29: 又此類過失言詞我自朋屬論式等中多已制伏)。

宇井博士は、この記述を紹介した上で、トゥッチ博士が『論軌』と『論式』を各々 Vādaividhāna (以下 VVa) と VVi に同定したことを批判し、『論軌』が VVi に、『論式』が VVa に対応するとした (宇井 1930: 宇井 1933)。彼はこの自説を論証してはならず、両書を巡る論述には誤解もあるが、漢訳名と梵語名の対応に関する限り、彼の説は今日的知見からみて妥当である。

また、ヴァスバンドゥ論理学の内的発展に関する彼の論述には鋭い洞察が含まれている。VVi が VVa に先立つとした点、両者の喩例学説の相異や VVi が五支作法を採用していた可能性の指摘等である。それらの洞察の着想を彼は中国語因明文献に存する『論軌』『論式』に関する叙述から得ているが、その中で本稿にとって重要な文軌の『因明入正理論疏』の一節を以下に挙げておく。

- ③文軌『因明入正理論疏』337c7-10: 又集量論中陳那云論軌論中以瓶有法爲同喩者其論非是世親造。或是世親未學時造。學成已後造論式論。即以所作無常爲同喩體不異我義。

## フラウワルナー博士による VVa と VVi の研究とその問題点

一方、フラウワルナー博士は 1933 年の論文で、Nyāyavārttika に基づきヴァスバンドゥに VVa と VVi の二つの論理学書が存したことを確認した。彼は VVa の内容を分析し、同書が純粋な討論術の書物であったことを解明した一方、Nyāyavārttika の VVi への引用・批判にも論及し、VVi が直接知覚と推理という認識論上の概念の叙述を含む論書であったことを指摘した。更に彼は 1957 年の論文ではディグナーガの PS とジネーンドラブッディ註の中に VVi の多数の断片を同定し、それらの叙述の内容と範囲が大略 NMu と重なっている事実から、ディグナーガは NMu の著作にあたって VVi を模範としたと推定し、その推定と収集した断片を基に VVi の再構成を試みた。

ところが、フラウワルナー博士の研究の前提には、漢訳名の『論式』と『論軌』

が各々 VVi と VVa に対応するとしたトゥッチ説を踏襲しているという明白な誤りがある (FRAUWALLNER 1957: 104, n. 3). この取り違えは看過できない。なぜなら、フラウワルナー博士の描いた「NMu は VVi を模範として書かれた」という筋書きにとって、NMu で肯定的に言及されるのが VVa であるという事実 (②) は、説明を要するからである。

## PS における VVi 批判

以下の PS 第 1 章の VVi 批判冒頭の記述は、VVa を重視する NMu の論述態度に通底する。

- ④ PS I 5,19f.: *na hi vādaavidhir ācāryavasubandhor atha vācāryasya tatrāsārāṇiścayaḥ. katham. anyathāvayavaprokṭeḥ. tenāsmābhir api pramāṇādiṣu kiñcit pariḥsaṇīyam.*  
 [和訳: すなわち、VVi はヴァスバンドゥ師のものでないか、或いは師はそれの無価値を確信している。どうして(それが解るの)か。(彼は VVa では: cf. HATTORI 1968: 115, n. 2.5) 異なった仕方で論証支分を説明しているからである。それゆえ我々も、(VVi に論じられる) 認識根拠等について若干、批判的に考察する必要がある。]

ここではディグナーガが論証支分 (*avayava*) の説に関して VVi と VVa の二書を対比的に論じている点が、注目に値する。ここで VVa が言及され、論証支分が問題にされるのは以下の理由による。すなわち、この箇所は、PS 第 1 章の他学説批判の冒頭に位置する為、同書の VVi 批判全体の序論としての意味がある。それゆえ、ここでは、VVi が多くの点で誤まっていることを従来周知の事柄から類推させることが眼目となる。そしてその際にディグナーガが提示した事柄が「VVa は VVi とは異なった形で正しい論証支分の学説を説いている」ということだった。彼が論証支分の問題を持ち出したのは、論証支分の学説が VVi と VVa の学説の相異、後者の優越を、最も端的に示していたからであると考えられる。

このことは、NMu が論証支分の問題に関して VVa に従うと述べている事実と対応する (②)。そこで説かれていた VVa の論証支分は三支作法であった。つまり、「VVa が VVi とは異なった形で説いている正しい論証支分の学説」とは三支作法に他ならない。そうだとすると、VVi が説いていた論証支分の学説は、三支作法ではないことになる。

さらに、服部博士が指摘したように (HATTORI 1968: 114f., n. 2.4)、先に紹介した文軌の記述は上掲の PS (とその註) の記述と並行的である。だが文軌によれば、陳那の批判点は、世親が喩例の学説に関し『論軌』では喩えられるもの (= 瓶)

のみをもって喩例としたことにあった (③)。これには根拠はあるのか。

VVi の喩例の定義は PS 第 4 章の VVi 批判の箇所です。次のように論駁されている。

⑤ PSV ad PS IV 15 (筆者の還梵): *vādavidhau tu tayoḥ sambandhanidarśanam dṛṣṭāntaḥ, yad idam abhidhānam yathā ghaṭa itī. yena vā sambandho nidarśyate, sa dṛṣṭāntaḥ, yad prayatnāntariyakam tad anityam itī. evaṃ ca yathā ghaṭa ity etad ayuktam, nidarśyasyādṛṣṭāntatvāt, iyatā cāvinābhāvitvam śakyate nidarśayitum.*

[和訳: VVi では、「その両者の結合関係を表示する手段が喩例である。「瓶の如し」という言明がそれである」、あるいは「およそ努力の直後に生じたものは無常である、といった類の、それによって結合関係が表示されるような (文章) である」(という)。しかしこの場合、「瓶の如し」というのは正しくない。例示されるべき (瓶等の事物) は喩例ではないからである。また、それだけでは不可離関係を表示することはできない。]

フラウワルナー博士は以上の PS 本文の記述をジネーンドラブッディ註の一部と折衷させ VVi の再構成の一部とし、例示される事物と不可離関係を表わす命題の両方を備えたものを VVi の喩例の定義とみなした (FRAUWALLNER 1957: 119)。他方、桂博士は VVi が単に「瓶の如し」と言う喩例も認めていた可能性があるとしている (桂 1986: 54)。筆者は、ジネーンドラ註と還梵 PS から、VVi における喩例は第一義的には単に「瓶の如し」というもので、それに不可離関係を表わす命題を付加する場合も認めていたとみる。その理由は、ディグナーガの批判の矛先が専ら「瓶の如し」という喩例に集中しているからである。上記の文軌の伝承は、以上の点でディグナーガの説を正しく伝えていると言える。そして喩例が単に「瓶の如し」であった場合、その論証支分は三支で完結していなかった可能性が高い。ヴァスバンドゥに先行する瑜伽行派の論理学書でも喩例は命題を伴わないが、そこでは喩例に終わる三支ではなく五支が説かれている (矢板 2005, 5\* 6ff.)。

以上の検討から、さしあたり、VVi には三支作法ではなく、瑜伽行派の論理学が説いたような五つの論証支分が説かれていた可能性が浮かび上がる。

## VVi と NMu の論述構成の問題

以上を踏まえ NMu の論述構成を検討する。ディグナーガは冒頭に「論証」と「論破」の区別を提示した上でまず論証を論じ、その中で論証支分である主張・理由・喩例を順次に説く。そして後半の論破の説明に入る前、論証の説明の最後で直接知覚と推理に言及する。すなわち NMu は、大枠としては論証の叙述の一部として直接知覚と推理という認識論的な範疇を論じる、という構成を持つ。この

論述構成は、PS 以降の体系とは異質だが、上記のようにフラウワルナー博士は、この構成が VVi に由来すると推定した。この主張・理由・喩例・直接知覚・推理という論述順序について、NMu が VVi を概ね踏襲した可能性は高い。なぜなら、この論述順序は『瑜伽論』『七因明処』等における八能立 (*sādhana*) の列挙順 (矢板 2005: 101, 15ff.) に準じたものだからである。ディグナーガがヴァスバンドゥを介して瑜伽行派の論理学の伝統に連なっていた可能性は高い。

問題はヴァスバンドゥが瑜伽行派の伝統とディグナーガの間のどこに位置するかである。『瑜伽論』と NMu で論じられる論証の範疇をみると、両者は二点で明確に異なっている。推論式の支分については、前者は五支だが後者は三支のみである。また認識論的な論証手段としては、前者は直接知覚、推理とともに聖言を説くが、後者では聖言は除かれる。フラウワルナー博士による VVi の再構成は、この二つの相違点がヴァスバンドゥに由来するとの推定に立つ。そして、この推定の妥当性の判断に際し、冒頭で述べた NMu における VVa への言及が重要な意味を帯びてくる。

ディグナーガは何故 VVi の構成に倣って著した NMu の冒頭で VVa に言及する必要があったのか。この問いに対する回答が、VVi では五支分からなる論証が説かれていたという仮説である。VVa では明らかに三支作法が説かれていた。二論書の先後関係は断定できないが、ディグナーガが論証支分に関しては VVi に従わないことを含意する為に三支作法を説く VVa に言及したと考えれば、上記の疑問は解消する。ディグナーガは NMu の著述に当たって大枠としては認識論を含む VVi に拠っているが、彼の論証支分の学説は三支作法に他ならない。

さらに認識手段に関しても、VVi がそれを直接知覚と推理とに限ったとは考え難い。何よりディグナーガは NMu の認識手段説の導入部分で ①、「認識手段は二つに限られる。これらは各々個別相と普遍相を認識するからである」と強調している。これは、二種の認識対象に応じて認識手段は存在するが故に直接知覚と推理のみが認識手段である、とする新説を宣揚する為ではなかったか。

以上、NMu は VVi の構成に倣って書かれた論書ではあるが、その際ディグナーガは VVi をかなり改変したと推定される。中でも論証支分に関しては、ディグナーガは VVi の説いていた伝統的な五支分からなる論証を、VVa に従って三支作法に改めた可能性が高い。認識手段を直接知覚と推理とに限ったのも、NMu におけるディグナーガの新機軸であろう。

では最後に、①の「爲開悟他」「爲自開悟」の帰趨はどうなるのか。これに関

連し、NMu には VVa への言及と並んで今一つ説明を要する点がある。それは推理の説明の末尾に位置する「已説能立及似能立」(NMu 3c16) という文言の存在である。実はディグナーガは既に一度、主張・理由・喩例を説明し終わり認識手段の説明に移る直前に「如是略説宗等及似。即此多言説名能立及似能立」(①)と述べ、論証学説の提示の終了を宣している。なぜディグナーガは推理の記述の後に重ねて論証の説明を総括するのか。筆者はこれを、NMu において①の箇所が付加されたことにより論証の記述の総括に重複が生じた、と解釈する。第二の総括は元来 VVi に存在していた可能性が高い。瑜伽行派的な論述構成を保持していたと推定される VVi にとって、八能立の説明が終わり論駁の説明が始まる箇所は、論証の説明の結語が位置する場所として最も相応しいからである。ディグナーガはその記述を敢えて削除せずに①の箇所を付加したのではないか。

以上より、①の叙述は、フラウワルナー博士の推定とは異なり、ディグナーガの創造物と見るべきである。従って、PS の二つの推理の分類の濫觴はヴァスバンドゥではなくディグナーガ自身の NMu にあった可能性が高い。

---

〈文献と略号〉

PSV [K]: *Pramāṇasamuccayavṛtti*: P 5702, Vol.130, Tshad ma, Ce 93b4–177a6; PSV [V] (D): *Pramāṇasamuccayavṛtti* (Dignāga): D4204, Vol.1, Tshad ma, Ce 14b1–85b7; PS I: *Pramāṇasamuccayavṛtti* I: Ed. E. STEINKELLNER, Web Version; NMu: 『因明正理門論』 T 1628; 『理門論述記』: T 1839; 『因明入正理論疏』: 大日本統蔵経第 86 卷 4; FRAUWALLNER 1933: “Zu den Fragmenten buddhistischer Logiker im Nyāyavārttikam.” *WZKM*. Bd.40. S.281–304; FRAUWALLNER 1957: “Vasbandhu’s Vādaividhiḥ.” *WZKSÖ* Bd.1. S.104–146; HATTORI 1968: MASAOKI HATTORI: Harvard University Press.; 桂 1977: 桂紹隆「因明正理門論研究〔一〕」, 『広島大学文学部紀要』第 37 卷, pp.106–126; 桂 1981: 「同〔四〕」, 第 41 卷, pp.62–82; 桂 1982: 「同〔五〕」, 第 42 卷, pp.82–99; 桂 1986: 桂『広島大学文学部紀要第 45 卷特輯号 1 インド論理学における遍充概念の生成と発展』; 宇井 1930: 宇井伯壽『印度哲学研究第五』(東京): pp.471–503; 宇井 1933: 宇井『仏教思想体系 5 仏教論理学』(東京): pp.173–194; 矢板 2005: 矢板秀臣『仏教知識論の原典研究』, 成田山新勝寺。

(平成 21–23 年度科学研究費基盤研究 (C)「ディグナーガ論理学の再構築」(研究代表者: 龍谷大学・桂紹隆教授)による研究成果。)

〈キーワード〉 Vādaividhi, 『論軌』, Vādaividhāna, 『論式』, Nyāyamukha, 『因明正理門論』, parārthānumāna

(筑波大学大学院准教授, Dr. phil.)